

# 鹿大広報

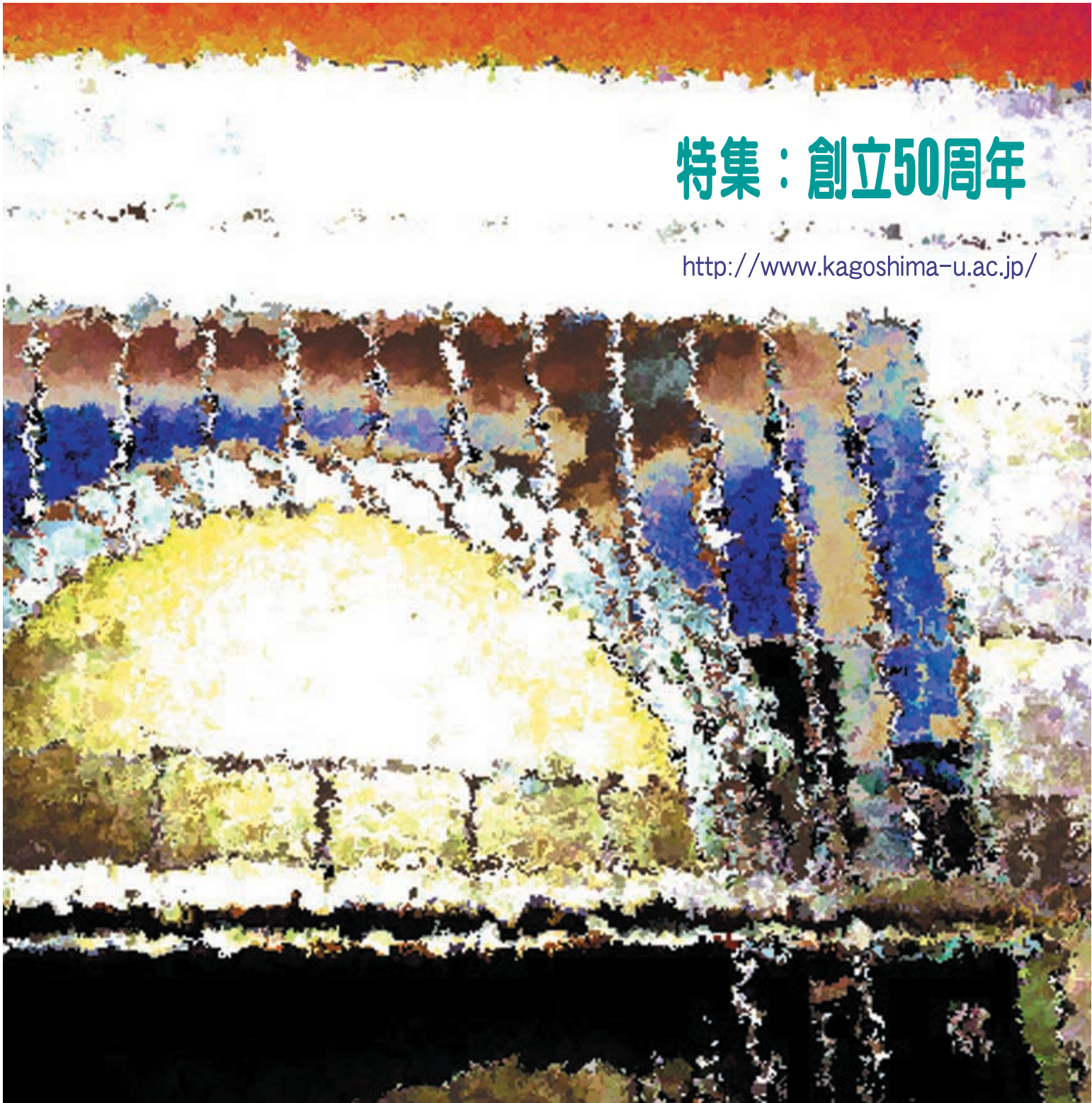
No.151

Sep/1999

編集・発行  
鹿児島大学  
広報委員会

特集：創立50周年

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



# 目次

## 特集 創立50周年

創立50周年記念を共に祝おう .....	学 長 田中 弘允 .....	3
鹿児島大学50年の沿革 .....		4
母校への感謝をこめて .....	鹿児島県副知事 吉留 史郎 .....	5
鹿大教育学部での30年 .....	教育学部教授 塚田 公彦 .....	6
創立50周年雑感 .....	理学部教授 佐竹 巖 .....	7
五十年 .....	医学部同窓会長 尾辻 義人 .....	8
思い出 .....	歯学部同窓会長 立石 基高 .....	9
記憶の断片 .....	工学部教授 松村 博久 .....	10
“あらた”で出会った「よき師」たちの言葉 ... かがしまの食を語る会会長 .....	八幡 正則 .....	11
創立50周年に寄せて .....	名誉教授(水産学部) 今井 健彦 .....	12
鹿児島大学に感謝 .....	国立療養所霧島病院長 鹿島 友義 .....	13
鹿大の二つの大改革 .....	鹿児島県立短期大学長 田川日出夫 .....	14
「鹿児島大学創立50周年記念事業計画」 .....		15

## 学内だより

随 想 ... モンテナルパの日本人墓地 .....	栄鶴 義人 .....	16
保 健 ... アルコール依存症 .....	森岡 洋史 .....	17
留學生日記 ... 日本で学ぶ理由 .....	クスヌル ジャキン .....	18
日本と生活の意義 .....	モニハラポン エリノラ .....	18
研究室紹介 .....	教育学部・生涯教育総合課程 .....	19
平成11年度の就職セミナーについて .....		20
サークル紹介 .....		21
新任教官紹介 .....		22
学内ニュース .....		25
図書館だより .....		27
編集後記 .....		27

### 表紙デザイン

「創立50周年にあたり、鹿児島大学の先進性を象徴する稲盛会館を下敷きに未来への期待を表現した」

教育学部 教授 美術教育講座 梅田 晴郎

## 創立50周年

## 創立50周年記念を共に祝おう

学長 田中弘允



わが鹿児島大学は、昭和24年に創設され、このたび50周年の節目を迎える。これを記念して、来る11月15日を中心に、記念式典、祝賀会、京都賞受賞者講演会、県内各地で記念講演会等を開催することになった。また、記念誌の発行も予定されている。

このような行事等に加えて、私ども教官、事務官、学生全員が、この50年の歴史を振り返り、その意義を考え、鹿大の将来の夢を語り合う良い機会にしたいと思う。

本学はこの50年間、6万人を超す学生を社会に送りだしてきた。それぞれの卒業生は、世界中至る所で活躍している。鹿児島地方についてみると、文化、産業、社会、教育等様々な分野で、指導的役割を果たし、地域の発展に大きく貢献している。

また、私どもは世界に誇るべき超一流の研究を含む数多くの研究成果をあげてきた。これは、理工系、生命科学系、農水系、人文社会系、教育、芸術等の広汎な分野で行われてきたのである。このように人類の知的財産に新しい財産を加えることができたことを誇りにしたいと思う。それらの実績を基に、産学官連携等を含む社会貢献にも誇るべきものを残したのである。

また最近では、世紀末の社会に課せられた社会的課題や地球的課題を特定し、総合大学の特徴を生かして研究に取り組む鹿児島大学全学共同プロジェクトが順調に活動を続けている。わが大学がもっている最高の「知」を総合してよりよき社会を構築するための政策にまで展開されることが強く期待されている。

このような光り輝く業績とは別に、私どもが行った過去の行為を批判的に評価しなければならない部分がある。例えば、学園紛争によって表面化した矛盾の解決に充分対応したかどうか、社会の急激な変動に真正面から取り組む方法が適切であったかどうか、大学の教育・研究等の内容を社会に情報開示することが充分であったか、また、物質文明の光と影を明確に読み取り、遅れることなき対応ができたであろうか等である。

現在の大きな課題についても反省がある。今私どもは、国立大学は独立行政法人化や民営化へ移行すべきであるという論調に立ち向かっているが、特に感じることは、社会の大部分の人々にはその意味することが全く伝わっていないことである。行財政上の諸問題の解決や、行政のスリム化・効率化のために、教育や研究を行っている国立大学をも一律に取り扱い、独立行政法人化の導入や定員削減の実施を十分な考察や議論をすることなく進めているのであるが、私どもはこの意味するところをより広く情報開示し、21世紀の日本の運命を担う教育・研究のあるべき姿を国民全体が考えるように努力しなければならない。教育の本質論を議論することなしに、一方的論理によってこの国の教育研究の方向を決めるやり方が、厳しい批判を受け、改善されることを期待したい。

私どもは、この問題に限らずより積極的に、大学をとりまく情報を開示し、社会において議論するように努力すべきである。

私自身、多くの反省があるが、この反省を次の発展への糧にしたいと思うのである。

このように、鹿大の歴史を認識し、それを基にして将来の発展への構想をつくることは極めて大きな意義を有することであろう。

さて、お祝いに際して、一般に人々は単に集まって祝うだけではなく、そこに何らかのモニュメントを建造するを行ってきた。それは後世の人々へのメッセージでもあり、あるいは人類の知的財産への寄与や敬承のために必要なものであってもよいと思われる。

私どもはこのような目的で、協賛事業を実施することにした。例えば寄附講座や教育研究基金等を我々自身の手で後輩のためにモニュメントとして残したいと思っている。

次の時代に向けて、鹿児島大学が大いに飛翔するために、構成員のみならず社会の人々と共にこの50周年記念の機会を捉え、鹿大の歴史、現状、将来について、また、人類の知的財産の創造、継承等について考え、計画し、そして実行していきたいと願っている。

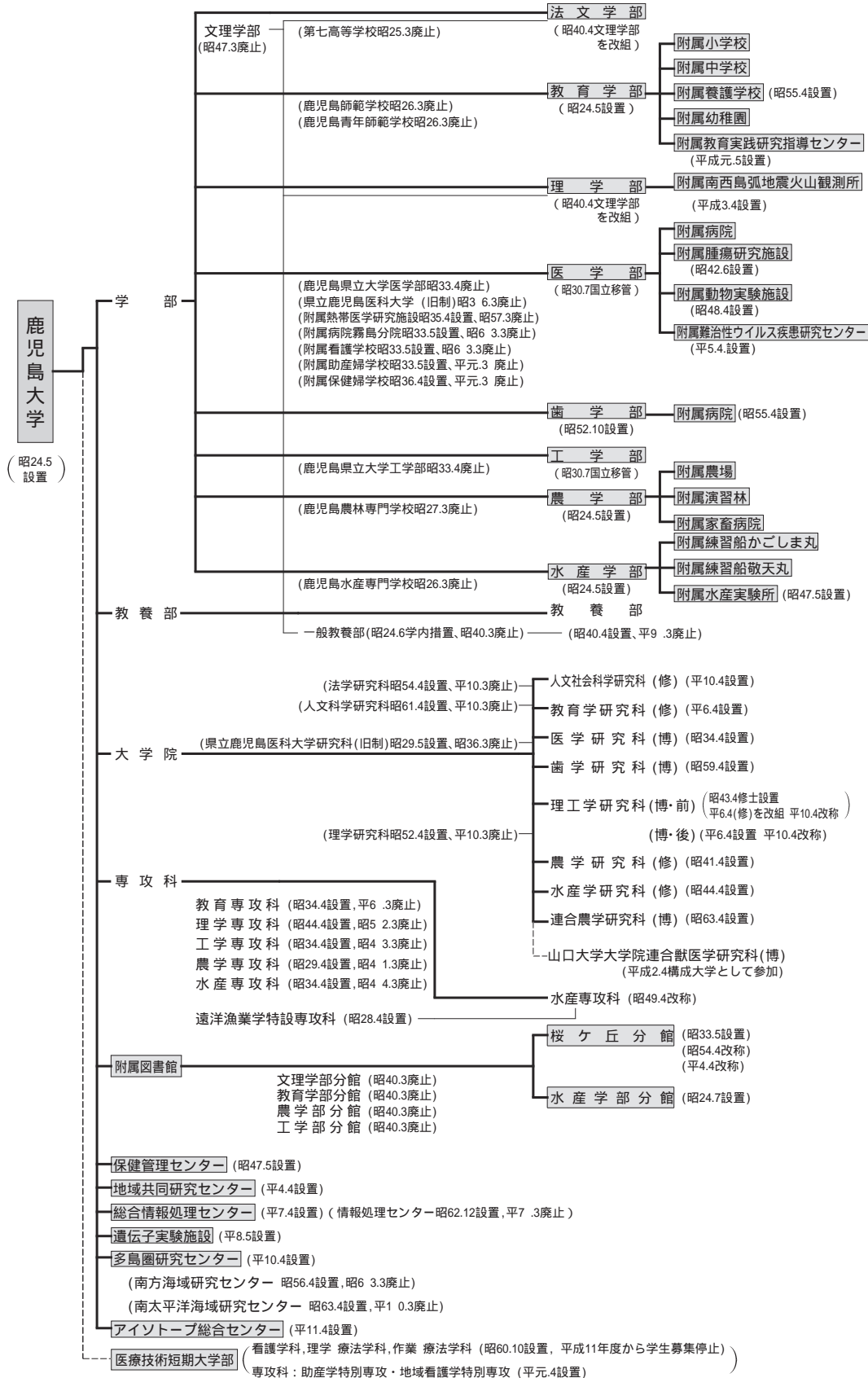
# 鹿児島大学50年の沿革

鹿児島大学は、昭和24年5月国立学校設置法に基づいて、第七高等学校・鹿児島師範学校・鹿児島青年師範学校・鹿児島農林専門学校及び鹿児島水産専門学校を母体として、文理・教育・農及び水産の4部門をもって発足した。

昭和30年7月1日医学部及び工学部を県立大学から移管増設し、更に昭和40年4月1日文理学部を改組、法文学部・理理学部の2学部及び教養部が新設され、ここに7学部と教養部を備えた総合大学となり、昭和52年10月1日歯学部を設置し、更に、昭和60年10月1日に医療技術短期大学部、昭和63年4月1日に大学院連合農学研究科を設置した。

平成8年度から従来の教養課程と専門課程の区別を廃止し、新たに共通教育科目、基礎教育科目、専門教育科目に区分した教育課程を編成し、4年(6年)一貫教育を全学教員の参加のもとに実施した。

平成9年度からの教育研究組織の改革に合わせて、教養部を発展的に解消し、共通教育科目および基礎教育科目は共通教育委員会において企画・実施していくことになった。



## 母校への感謝をこめて



昭和33年  
文理学部卒業  
現：鹿児島県副知事

鹿児島大学創立50周年おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

小生、昭和33年卒で、満64歳になります。

忙しさ故に、過去を振り返る余裕もなかった我が人生でしたが、今回の原稿を書きながら、卒業後40数年は、長いようで、短かったなあという感じがいたしております。

昭和29年まだ戦後という時代に入學し、食物も満足ではありませんでしたので、アルバイト捜しに奔走し、1日働いて100円程度の賃金をもらい、その足で鹿大食堂で食べた15円のウドンのおいしかったことなどをなつかしく思い出しております。

あまり勉強もいたしませんでしたが、良い友人、生涯の恩師となる良き先生に恵まれ、生活面では苦しい中ではありましたが、意義深い学生生活が送れたと思っております。

そして、この鹿児島大学での4年間は、自分の人生にとって、いかに大事であったか、今さらながら、その思いを深くいたしております。

学生生活及びアルバイトを通じて、人とのつきあいの大切さ、働くことへの喜び、郷土鹿児島に対する愛着など自分の人生観は、この時期に育ったように思います。

卒業後も、母校鹿児島大学の卒業生としての誇りを失わない様たえず気を引きしめてまいりましたし、母校に対する感謝の気持は、人一倍持っているつもりです。

大学1年の時、友人にすすめられて鹿大囲碁部に入会しました。

金のない学生にとって、これほど良い趣味はないと思います。弁当を持って碁会所に通い、腕があがるにつれて、益々その魅力にとりつかれていきました。

当時の鹿大囲碁部には、四段・五段という強い人が数人おられ、私が、2年の時、大学対抗囲碁大会に出場したことがあります。5人1組で、九州大会で優勝し、全国大会で京都まで出かけて試合にのぞみました。

鹿児島県副知事 吉留史郎

おしくも1回戦で敗れましたが、良い思い出となっております。

囲碁は、私の人生を楽しくしてくれた最高の趣味です。

負けたくないという闘争心、即決で物事を判断する力を与えてくれました。

今、五段程度ですが、まだまだ強くなりたいとがんばっております。

私は、大学卒業と同時に鹿児島県庁にはいり、もはや40年になります。

県庁には、鹿児島大学の卒業生が、たくさんおります。そして、どうしたら鹿児島が発展するか、どうしたら県民の生活が豊になるかと、連日がんばっております。

勿論、郷土の発展に尽くしておられるのは、地元に残った方だけではありません。

県外に就職された方々も、郷土鹿児島に対する思いは、皆さん強いものがあります。

鹿児島大学工学部卒の京セラの稲盛会長さんは、川内・国分・隼人にすばらしい先端技術工場を作られました。そこでは、今や8千人の人が働いており、本県の産業発展に大きく貢献をいただいております。

他にも、県勢発展のため御尽力いただいている卒業生の方は、たくさんおられます。

感謝に勘えません。厚く御礼申し上げます。

鹿児島大学は、私どもの在学中と比べると学部も充実され、名実ともに、地域にねぎした、すばらしい大学に成長しておられます。

残念ながら、卒業生の県外志向は、昔と変わりませんが、学業よりも、気力あふれる若者を送り出していただくことを念じつつ、また、母校の益々の御発展をお祈りしながら、筆をおかせていただきます。

## 鹿大教育学部での30年

教育学部教授 塚田 公彦



現：教育学部教授  
(自然地理学・地誌学)  
日本地理学会・日本水文学会

私が鹿大教育学部地理学担当の専任講師として赴任して来たのは1970年4月のことである。本学は今年開学50周年を迎えるのであるが、間もなく私自身も赴任後30周年となる。大学にとっては半世紀という大きな節目となり、それは私にとっても一つの節目ということができる。こんな時でもあったので、広報委員のI先生から何か50周年記念特集号にふさわしい一文をと乞われた時には、何とかなろうと気楽な気持ちで引き受けてしまった。それを今悔やんだところで仕方がないので、ここでは、私自身の30年を振り返りながら、本学部のそれに重ね合わせて見たいと思う。

赴任当時の学部キャンパスには正面に半分だけ残されている4階建ての校舎が一つポツンとあるだけで、それ以外は木造の2階建ての事務棟、講義棟、美音棟などが散在していた。また、当時は鴨池にあった空港への飛行機の離着陸の音はしばしば講義の中断となり、加えて桜島の爆発・降灰は連日のように講義棟や研究棟にも容赦なく流れ込んで来るという有様であった。勿論、エアコン設備などは望むべくもなく、窓を開け、扇風機を使いながら仕事をしていると、いつの間にか机上に灰が積るということも日常的なことであった。

一方、全国各地で吹き荒れた学園紛争も、徐々に終息しようという時期でもあったが、教育学部では附属学校とのギクシャクした関係は、その後も長く尾を引き、校友会が夜の12時を過ぎるまで続くことも度重なった。丁度この頃、学位論文を仕上げようとしていた私には、これら硬軟両面の環境条件が極めて劣悪なものに思えて、早くここから逃げ出したいと思ったことが何度ともなくあったことをよく憶えている。やっとの思いで論文を仕上げたのは8年目の秋のことである。そうこうしている間に早くも10年が過ぎて行ったが、キャンパス環境には殆んど変化は起こらなかった。今にして想えば、この当時は「古き良き時代の大学」という残像を引きず

りながら、それでも良しとしていた時代でもあったのではなかろうか。

80年代は日本が高度経済成長を遂げる時代でもあった。教育学部のキャンパスにおいては建物の新営が相継ぐ時代となったのである。まず、理系棟・事務棟の新営を皮切りに講義棟や技術棟、理系棟の東半部などが次々に建設され、古い建物の撤去が相継いだ。続いて文科棟、美音棟、教育実践研究指導センター棟も完成し、キャンパス景観は見違える程に一変した。この外にも第2体育館、プール、生協の南食堂の新営も行われ、現在に至っている。一方、自分史に関するこの時期は、2年の教務委員の任期を終え、その年の秋から8ヶ月間文部省の在外研究の機会を得たことに始まる。帰国後、かなり長い間上記の建設工事の騒音に悩まされながらも、遠くない将来、新しい建物への期待も加わり、充実した日々を送っていたように思う。唯一つ、当時、気がかりだったことは、教員養成系大学・学部の大学院設置が次々と行われていたにもかかわらず、本学部では一向に具体化していけないことであった。いうなれば、この時期は教育研究のための施設整備に費やされた時代である。

90年代は周知の如く、大学改革の波が押し寄せた時代である。その理由や根源を詮索するつもりはないが、一言で言えば、社会が変わり、世界も大きく変わった結果、変革を余儀なくされているのであろう。92年になってやっと修士課程の設立が実現した。設立時には2専攻5専修であったが、その4年後、2専修を加えて7専修となった。けれども、これでは未完成である。折しも教員養成系大学・学部への改革・改組が迫られ、学生定員の削減を5000人も求められている時である。この期に及んでなお3専修を残しているのは本学のみである。ところで、今求められている改革は、直接的には制度とか組織についてである。しかしながら、もっと大切なのは学部を構成する全ての人達の意識の改革であるように思われる。

## 創立50周年雑感

理学部教授 佐竹 巖



現：理学部教授

本学は今年創立50周年を迎える。人生で言えば、まさに気力充実した華の中年を迎えたという事になるだろうか。この節目を祝って、50年史の発行や講演会の開催など多くの記念事業が計画されているが、単なるお祭り騒ぎに終わる事なく、21世紀に向けて本学が更に大きく飛躍するための契機となる事を期待したい。

俗に10年一昔と言うが、半世紀におよぶ時の流れは、人もそしてまた大学も大きく変貌させるものである。筆者は、1976年の赴任以来実に23年間を本学で過ごした事になるが、長く思われるこの歳月も、本学の歴史に比べれば僅か半分にも満たない短い期間に過ぎない。しかしこの期間に限っても、本学の発展には実に目を見張るものがある。学内の主要道路は立派に整備され、夜ともなれば、淡い街灯が周囲を照らし、何となくロマンチックな雰囲気醸し出している。井形学長時代に建築が始まった中央図書館も、一時は映画のセットの如く前面のみで奥行きが無い、何ともユーモラスな姿であったが、現在では本学の象徴として堂々たる偉容を誇っている。各学部の施設も次第に整備され、工学部には四角い箱の中に丸い球が鎮座した真にユニークな造りの稲盛会館が寄贈され、多くの催しに活用されてる。また、総合情報処理センターを中心としたネットワーク網の整備に代表されるソフト面の充実も著しく、情け無い話ながら、筆者のような老骨には最早やついて行けない観がある。1949年、戦後の復興も緒についたばかりの頃の本学草創期を知る人々には、現在の整備された本学の姿は感慨深いものであろう。

開学以来の最も大きな変革は、何と云っても早坂学長の就任と同時に始まった、本学の教育制度と教官組織全般にわたる所謂大学改革であろう。幸か不幸か筆者は当時理学部長の職にあり、否応なくこの改革の

嵐に巻き込まれる羽目になってしまった。本学は国立大学の中でも有数の規模を誇る大学であり、従って全学的な意見の集約は大変な作業であった。改革全般を統括する全学委員会が設置され、その下に専門委員会、さらにその下にはワーキンググループが置かれ、連日の会議に次ぐ会議に疲れ果てた事が今となっては懐かしく思い出される。早坂学長の御心労は察するに余りある。週末には天文館で一杯飲んで下手なカラオケを歌うのが唯一のストレス解消法であったが、大学改革の仕事から完全に開放された後も、この習性からは抜け出せず、とんだ改革の余波に些か困っている。

ともあれ大学改革は目出度く実現し、新しい共通教育制度が確立されると共に旧教養部は廃止され、各学部の組織並びに専門教育体制も再編された事は周知の通りである。また、この改革を土台に理工学研究科が設置され、理学部の長年の懸案であった博士課程の設置が実現した事は、理学部の一員として真に嬉しいかぎりである。工学部の御理解、御協力に心から感謝申し上げます。今回の改革が実を結び、新しく導入された自己点検評価の制度とあいまって、本学の更なる飛躍に繋がる事を心から願うものである。

大学を取り巻く環境が急速に変化している事は今更指摘するまでもない。その最たるものは確実に到来する少子化の波であろう。若い世代には大いに子造りに精を出してもらいたいが、冗談にもそんな悠長な事を言っではいけない事態である。本学をより魅力ある大学にするためには、第二、第三の大学改革も必要になってくることであろう。筆者は来春退官の予定であり、もはやお役に立つ事は叶わないが、せめて学外から鹿児島大学の今後の発展を念じ、声援を送りたいと思っている。

# 特集

## 「五十年」



昭和25年～昭和61年  
鹿児島大学医学部第二内科  
昭和61年～平成9年  
鹿児島県民総合保健センター所長  
平成3年～  
鹿児島大学医学部同窓会(鶴陵会)会長  
平成5年～  
鹿児島日英協会会長

鹿児島大学創立50周年おめでとうございます。戦後の混乱期を乗り越え、基盤の整備、発展に貢献された方々に敬意を表する次第です。

私は医学部同窓会の歩みを記して、鹿児島大学50年の歴史の一端を振り返ってみます。

昭和17年(1942)

県立鹿児島医学専門学校設置許可  
昭和18年3月25日

九州帝国大学教授医学博士 安慎一校長就任  
昭和18年4月20日

第1回入学式を仮校舎(石造りの  
現県立博物館)において挙行

かくして鹿児島での医学教育は始まったのである。

さらに県立鹿児島医科大学(1947) 鹿児島県立大学医学部(1952)を経て、国立鹿児島大学医学部(1955)となった。

同窓会の発足：

同窓会の歴史を振り返ると、母校の辿った苦難、変遷の歴史と表裏一体をなしている。

昭和23年3月、第一期生の卒業式の翌々日に、戦後の荒廃した鴨池遊園地の一角を借りて、同窓会の結成式を挙行了。想えば小なりといえども雄々しい鶴陵会の産声であった。

医師免許なき卒業式、そしてインターン、加うるに当時の暗澹たる世相下に、何かしら不安と焦燥を混えた複雑な心境にあったが、この混沌たる時代になんとしても一期生としてなすべきこと、即ち同窓会の結成、発会式だけはと念願した。(昭和23年卒、故西山幹男先生の原稿より)

私は一期生の方々の母校への愛着、想いに感動するとともに私共がさらに次の世代に伝える必要があると考え、鹿児島大学医学部二十五年史より再録しました。

同窓会の歩みと事業：

- 1) 安慎一初代校長先生の胸像建設  
(昭和41年9月11日)  
昭和22年、廃校か存続かの岐路にたったとき先生の御人徳、統率力、行動力無くして今日の鹿大医学部はありえなかったのでは！
- 2) 恩師の退官行事、謝恩会への参加、協力
- 3) 鶴陵会報の発行(昭和45年8月30日)現在第27号まで発行され、医学部と鶴陵会同窓会員と鶴陵会とを結ぶ重要な絆としての役割を果たしている。
- 4) 医学部及び学友会主催行事への協賛
- 5) 鹿児島西洋医学開講100年祭及び

医学部同窓会長 尾辻 義人

鹿児島大学医学部開講25周年記念行事への協賛

- 6) 鶴陵会奨学金制度創設(昭和57年4月)現在までに48名の方が貸与を受け立派な医師として頑張っている。

創立50周年記念事業として

(平成5年4月24日)

- 1) 鹿児島大学医学部創立50周年記念式典：鹿児島市市民文化ホールで挙行された「医学と文学」という題で渡辺淳一氏の記念講演があり、参加者に大きな感動を与えた。
- 2) 鹿児島大学医学部五十年史の発行  
(平成6年8月31日)  
1047頁の50年の歴史を偲ばせる記念誌が発行された。
- 3) 創立五十周年記念会館「鶴陵会館」完成記念式典(平成9年3月8日)：鉄筋コンクリート造、地上2階、地下1階、建て面積1,328.42㎡、延面積1,804.79㎡の近代的な記念会館が建築された。  
ところが建築が予定された頃がいわゆるバブルの絶頂期で、建築資金をどうして集めるかが大きな課題であった。  
同窓会、医学部、地域の皆様の絶大な御協力で、寄金募集の難関を乗り越えて乗り切ることができた。

同窓会の現状：

現在、鹿大医学部の卒業生は4,456名であるが、物故者その他を除くと4,129名である。

地域別では

北海道・東北	22 (0.53%)
関東	363 (8.79%)
信越・北陸・東海・近畿	274 (6.64%)
中国・四国	155 (3.76%)
九州(鹿児島県以外)	1,041 (25.21%)
鹿児島県	2,274 (55.07%)

地域医療については、鹿児島県医師会会長 鮫島耕一郎先生(S.23年卒) 熊本県医師会会長 柏木 明先生(S.25年卒)をはじめ各地で医師会のリーダーとして高齢化社会、介護保健など多くの難問が山積する中で活躍しておられます。

最後に鹿児島大学医学部出身で、教授として各地で医学教育に従事された方、または従事しておられる方は59名で、創生期に学んだ一員として50年の歴史を感ずると同時に、鹿児島大学の今後、益々の発展を祈って止みません。



## 思い出

歯学部同窓会長 立石基高



昭和60年3月  
鹿児島大学歯学部卒業  
現：立石歯科医院・院長

鹿児島大学創立50周年を迎えるにあたり歯学部同窓会よりの祝辞を申し上げます。鹿児島大学歯学部は南九州、沖縄における歯科医療の中核としての役割を担うという観点から昭和52年10月に創設され、平成9年に創立20周年を迎えた鹿児島大学で最も若い学部です。昭和59年1期生の卒業と同時に創立された同窓会は今年で16年目を迎え、卒業生は千人を越すまでになりました。ここで、一同窓生として私なりの学生時代の思い出を話し、学部のプロフィールの一部でも紹介できたらと思います。私は昭和54年2期生として入学いたしました。当時定員80名で内女性は7名でした。教養時代の2年間は郡元のキャンパスで過ごし、平常は大いに遊び試験前になるとあわてて勉強したように記憶しております。他学部の学生と一緒に授業を受講でき相互の交流ができたことは、今となっては貴重で懐かしい思い出です。

さて、二年生の後期からは水曜日のみは、宇宿キャンパスにて歯学概論等の授業が始まりました。初めての専門的分野の授業に今までとは異なり、いささか緊張し受講したような思い出があります。

先だって歯学部を訪ねる機会があり、講義棟、学生控室など懐かしく見ておりました。私達が専門1年に上がった時（昭和56年）校舎は未だ、ピカピカしており、一期生と私達だけしか使用していないせいか生活の臭いがあまりなくコンクリート臭だけがやけに鼻をつき、雰囲気的に少し違和感を感じました。しかし、3年4年5年と進級するに従い現在の模様と変わらない様に移行してきたと感じました。この場にたたずむと、昔の事柄がいろいろ思い出され気分は正に学生時代に返ったような気がしてくるようです。時には母校を訪ねる事も心に安らぎを与えてくれるような気がして良いものです。

さて私達を教えて下さった先生方には、名物教授と呼んで差しつかえない先生方も含め、多士済済で私達同様一からのスタートで歯学部を創り育てるという意気込みでは目を見張るものがあり、私達もそれ等に薫陶されました。先生方の思い出と当時の学部の心意気の一部がのぞけたらと思いエピソードを一つだけ上げさせていただきます。

実名をあげて申し訳ございませんが口腔病理学をお教え下さった浦郷篤史名誉教授、授業開始開口一番「マラソンを走らないと試験を受ける資格がない。」口腔病理の単位を取る為には、まず第一の条件として教授の指定する日、指定するコース（ハーフマラソン）を走らねばならないということです。先生の持論として他人の健康を預かる者は健康でなければならない。尤もなことです。その日から私達は一期生先輩諸氏の勧めもあり、マラソンの練習に精出しました。放課後キャンパスを走る同級生、浦郷先生も当然走っておられました。そしてその日がやってまいりました。それは後期の授業の初日、折り返しまでは皆で一緒に走り帰りは自由に走ることにになりました。産業道路沿いの歩道を走ったのですが今でも車で走るたび懐かしく思えます。結果はと申しますと、全員無事に完走し単位取得の権利だけは全員得られました。その後授業があり、皆受講し帰宅いたしました。私が同窓会の仕事を引き受けるに当たり、浦郷先生から封書にて激励の言葉をいただき感激いたしました。この場をかりまして深く感謝の意を表したいと思います。

その他基礎系、臨床系含めて個性豊かな先生方と知り合うことができ本当に良かったと思っております。特に基礎系の科目につきましては習っている時には初心に戻るという大切さが実感としてわかenかったものですが、臨床をやっていくうちにこの大切さがひしひしと感じられてきました。もう少し勉強しておけば良かったと思いながら再度本を開けている今日此の頃です。とりとめもなく思い出を書き綴りましたが、今振り返ってみれば、良きにつけ悪しきにつけ充実した学生生活であったと思えます。そしてその中で得た友人諸氏は私の一生の財産だと思っております。

創立50周年を期に歴史ある他学部と肩を並べられるよう研鑽していこうと思っております。同窓会は過去と現在を結ぶ役割もあると思えます。大学の改革も話題になっている現今何らかの形で母校に私達同窓会が協力できればと思っております。鹿児島大学の益々の御発展を祈念いたしまして、私の挨拶といたします。

## 記憶の断片

工学部教授 松村 博久



現：工学部教授

高校生の時、鹿児島大学に足を運んだ記憶がある。高校のある柿本寺（現加治屋町）から西鹿児島駅前経由の電車に乗り、終点の神田で下車した。いまの市電唐湊線が建設途上にあり、当時は神田で折り返し運転をしていた。神田停留所からは細い道をたどり、竹藪の中にある裏門を通して学内に入った。構内は農場と牧場が大半を占めており、建造物はまばらであった。大学への用件は、農学部の前身である鹿児島農林専門学校での運動会見物であり、そのプログラムの人気ものは豚、うさぎ、アヒルなどの家畜競走だった。それに法文学部と理学部の前身である文理学部の教室で、大学入試の全国統一試験となっていた進学適性検査の受験であった。試験会場周辺は、樹木や芝生の植栽および取り付け道路の整備が不十分で、荒地の中に建物だけが目立っていた。

なんの因果か縁あって、鹿児島大学の教官として1964年に赴任以来35年の月日が経過した。大学創立50周年の歴史を積み重ねてきただけに、高校時代に見た鹿児島大学と現在の外観や学内状況とは大きな隔たりがあり、躍進的発展の足跡を振り返ると感慨無量である。しかし、これまでの展開がすべて順調に進んできたわけではない。

大学改革を求める学生たちの東京や京都における学園紛争は、1969年には全国規模に拡大し鹿児島大学へも飛火した。大学の管理運営に学生参加の民主化を要求し、資本家のために奉仕するものであってはならないと産学協同路線に抵抗する学生などの大学に対する反発が強まり、バリケード・ストによる授業放棄や授業不実施などがあった。そしてひんぱんに開かれる学生との大衆団交や一部学生の暴力行動により、評議会や教授会が十分機能できずに機動隊導入の始末となった。問題解決へ向けて学内制度改革委員会が発足し、一般教育および専門教育のあり方、研究教育制度および管理運営制度の問題点、学内規律の問題点な

どが検討された。約2年間の審議結果をまとめた「学内制度改革案」が提出され、学内の教職員および学生からの意見と批判が求められた。しばらくは大学と学生の間での小競り合いがあったものの学園紛争は沈静化していった。

大学と産業界とが協力して、大学も産業界もともに発展していくための産学協同が再度全国的に方向づけられたのは、学園紛争から約20年後のことである。大学と民間企業等外部機関との相互協力による共同研究の推進ならびに地域社会における技術開発および技術教育の振興に貢献することを目的に、外部機関との折衝の窓口である地域共同研究センターが構想された。1987年から毎年3大学ないし5大学が整備され、現在は理系のある大学のほとんどに建設された。鹿児島大学は1992年に設置され、全学共同利用教育研究施設として共同研究や受託研究の推進ならびに科学技術相談の受け入れのほかに、産官学連携による起業化支援にも協力して地域振興に寄与している。

また、学園民主化について検討された学内制度改革の内容の一部は、1991年に設けられた鹿児島大学自己評価検討委員会の審議に生かされた。学内制度改革案では触れられなかった「社会との連携」についても評価項目に取り上げられ、一般社会人の教育および研究への受け入れ、市民を対象にした公開講座や講習会、民間との共同研究や受託研究などの実績を自己点検・評価している。最近では学内だけではなく、学外専門家の第三者による外部評価も受け入れて、教職員のさらなる刺激となっている。

これからは大学の独立行政法人への移行や大学教員の任期制など多くの課題を抱えてくるが、魅力ある特色を持ち、市民に親しまれる地域の総合大学として一層の発展を期待したい。後になったが、創立50周年にあたりこれまでの先輩や同僚のご努力ならびに市民や関係者のご支援に深く感謝申し上げます。

## “あらた”で出会った「よき師」たちの言葉



昭和26年  
鹿児島農林専門学校卒業  
昭和59年～平成2年  
鹿児島県農協連常務理事  
平成3年～平成7年  
鹿児島総研特別研究員  
平成9年～  
農学部非常勤講師

戦後の「飢え」の時代、旧制鹿児島農専で出会った「よき師」たちの言葉は、今でも心の襞（ひだ）にしみている。例えば、昨今の世相を思うときよみがえる言葉がある。

▷「将来の日本は東京からは生まれない」

- 鯨坂二夫先生 -

終戦前、加世田に疎開されていた鯨坂二夫先生（のちの京大教授、当時青年師範で講義されていた）の家に出入りし、書棚の本を読むのも勝手との厚遇を受けた。

進学に際し、東京教育農専を志望して面接を受けに上京しようとお伺いしたら、前日東京から帰ってこられたという先生が、膝を正してこうおっしゃった。

「君は日本再建のために農業教育者になりたい -、といったよね」

「東京の人心はすさんでいる -。将来の日本は東京からは生まれない！」

強い口調でおっしゃった先生のこの一言で、私は東京行きを断念した。

▷「際限なくアメリカ化する・・・、気掛かりだ」

- 中堀誠二先生 -

中堀誠二先生は農専に入るとき、鯨坂二夫先生が「教授の中堀君は京都大学以来の親友だ。紹介してあげよう」とおっしゃって、私の保証人にもなってもらった先生である。

ある日、先生が植物園を散歩するのに出会い、誘われるままにお供をしたときの話。

「先生、“アメリカナイズ”ばやりですが、どうなるのでしょうか」

- 際限なくアメリカ化する・・・、気掛かりだな -

- そのさき日本がどうなるのか、よく見えないんだ -

そして、「やっぱり・・・敗れたんだよな」と、つぶやかれ長嘆息された。

▷「君たち、GHQの3S政策に油断するな」

- 三浦虎六先生 -

農専校長の三浦虎六先生は、私を農協運

かごしまの食を語る会会長 八幡正則

動に開眼させてくださった恩師である。

あるとき、「君たち、GHQの3S政策に油断するなよ」と真剣な顔でいわれた。

GHQ（連合国軍総司令部）の「3S政策」とは、日本人の“特攻精神”を何としてもつぶさねばならないとして、アメリカの戦略プロジェクトが編み出した高度な占領政策である。作戦の標的にされたのが武士道と禁欲主義であった。

武士道を鍛練する剣道などへのエネルギーを、娯楽性のあるスポーツに向けさせる。禁欲主義にはセックス開放を当てる。伝統的習俗は、すべて民主主義に反するとして葬ってしまう。その教育宣伝活動をスクリーン（映画）で行う。

このスポーツ、セックス、スクリーンの三つの頭文字Sをとって「3S政策」と呼ばれたが、半世紀を経たいま、この政策はかなり成功したかのようである。

▷「よき師たちの憂いどおり・・・か」

例えば、かつて国際的にも高く評価された日本の「恥を知る」文化は、いまはどうか。各界のリーダーに不祥事が多すぎる。出所進退に恥を知る精神のかけらも見られない。

弱者をいじめる卑劣者がこんなにはびこるなど、五十年前にだれが予想しただろうか。

世界に類を見ないセックスの氾濫は、日本人と国の品格を下げるばかりである。

財政赤字は、何世代かかっても返しきれない - 等々、数え上げればきりが無い。

だが文明史から見て、ヨーロッパに発しアメリカ化された文明は明らかに衰退しつつある。そして今、環境破壊など「負の遺産」を背負いつつも二十一世紀が始まる。

転換期の若者にとって「よき師のことは」は心の襞（ひだ）にしみる。大学とは、よき「師」と「弟子」の出会いの場である。学生諸君の精進を切に祈る。

## 創立50周年に寄せて

名誉教授・水産学部 今井 健彦



昭和30年  
水産学部卒業  
名誉教授（水産学部）

1951年4月鹿児島大学に入学した。第七高等学校、農林専門学校、水産専門学校と、師範系学校を統合して設立された文理学部、農学部、水産学部および教育学部の4学部構成の新しい大学である。当時の教養部の学生気質は七高色が濃く、進学した水産学部には水産専門学校気質が受け継がれていた。戦災を免れた下荒田キャンパスの元鹿児島商船学校の校舎は古く、大学にふさわしいものとは言えなかったが、戦いで学ぶことから遠避けられていた学生達は、ここぞとばかり自由に幅広く学び、闊達に論じ合い、時には焼酎を酌み交わして青春を謳歌した。草創期の学部教育は、学制改革により水産専門学校から鹿児島大学に籍を置くことになった教官が担務した。当時の教官も、皆研究熱心であった。少ない器材を活用して研究計画を立て、実験装置を作り、実験した。学生達は教官研究の一端を卒業論文研究として取り組むことになっていた。このようにして漁業を科学する体質が培われた。

海洋生物資源を開発し、国民に食糧供給すると共に、輸出して外貨獲得することにより我が国の復興に寄与した水産業は、重要産業に位置付けられていたが、まだ体力は弱く、就職難は続いていた。幸い、1956年10月大洋漁業捕鯨部に採用され、南氷洋や北洋で母船式捕鯨に、北海道沖やブラジル沖で根拠地捕鯨に従事した。その頃の我が国には、神武景気、岩戸景気と言われた経済発展期が訪れ、遠洋漁業も飛躍的に発展した。大型漁船が数多く建造され、大学の練習船の航海士は、それらの船長要員として漁業会社に引き抜かれていった。筆者はその穴を埋めるために、1962年6月鹿児島大学に移籍することになった。以後、後輩教育に没頭した。往時の漁業学科の学生から「鬼」と言うニックネームをもらったが、「お兄」だよ、とすっとぼけながら毎年6ヶ月間、狭い船内で寝食を共にした。1973年4月、漁具漁法学講座に移籍した。同じ組織の中で、同じ講師の身分であった

が、全く新しい人生のスタートになった。まぐろ延縄漁業実習中、眠る時間を割いて収集したまぐろの生殖腺標本を捨て、「漁具が受ける流体抵抗特性」に取り組むことにした。水産先進国と自負するからには、漁具の基本設計を電算機で行うシステムを確立すべきと考えたのがその動機である。まず、平面網地の流体抵抗特性を解明することにした。毎年数名の学生が、前述の研究課題に関連したテーマに挑み、卒業論文や修士論文を仕上げた。それらの一部は学会誌などに掲載されている。浅学非才の筆者が、不惑の年を迎えての研究であったため初志貫徹できぬまま、昨年停年退職した。専攻科を含む5年間を学生として、実習船を含む35年間余を教官として鹿児島大学で楽しく過ごすことができたことを感謝している。教え子達は水産業界や海運業界で、また、水産技術公務員として、活躍し海外にも飛躍している。

地球環境保護を主張する数多くの団体は、野生動物を食糧とすることを否定している。21世紀中端に地球人口は100億人に達することが推定され、食糧危機が予測されているにもかかわらず、前述の団体は、銚先を漁業に向け、公海における刺網漁業禁止を勝ち取り、まぐろ延縄漁業に圧力を加えている。人口増加と生活水準上昇により動物蛋白食糧の要求が高まるのは自明の理である。その要求に応えることができる筆頭は海洋生物資源である。それらの資源量を把握し、再生産機構を解明し、持続生産管理システムを確立させ、更に、海を耕し基礎生産力を高めるなど、21世紀以後の食糧供給体制を今確立しなければならない。水産学は地球規模の学問であり人類の繁栄に不可欠な学問である。その拠点の一つである鹿児島大学は、8学部を擁し生物科学を得意とする研究者が数多く集い多彩な研究を展開している。創立50周年を迎えるにあたり、鹿児島大学の洋々たる前途を祈念しつつこの稿を終える。

## 鹿児島大学に感謝



昭和36年  
医学部卒業  
元医療技術短期大学部部长  
現：国立療養所霧島病院長

鹿児島大学創立50周年、おめでとうございます。有意義な企画が予定されているが、これを機に鹿児島大学が地域に根ざしつつさらに世界にはばたかれんことを期待する。

50年前、小生は男師附属小学校にいた。いつごろだったか定かでないが、自分の学校の名称が変わり、しかもそれがやたらに長かったのに驚き、当時の「こども南日本」という週刊新聞に書いたことを記憶している、それは「鹿児島大学教育学部・鹿児島師範学校附属小学校武教場」というものであった。これが鹿児島大学の創立の時だったのだなと今になって思う。

もう一つ鹿児島大学創立に関して忘れられない記憶がある。私事にわたって恐縮であるが、小生の父、鹿島仁はそのころ、第七高等学校に勤めており、鹿児島大学創設準備にかかわっていた。カリキュラム、教員予定者の記録、建物の設計図等、おびただい書類に取り組んでいた。文理学部のことだけでなく、当時七高の校長で鹿児島大学の初代学長になられた緒方先生のもとで4学部の調整役も果たしていたことは後になって知った（鹿児島大学25周年記念誌巻末座談会参照）。小生が医療技術短期大学の創設準備に従事した時に同じような書式を見てそれらが大学設置審議会に提出する設置計画書だったのだと理解し、もうその時にはすでに他界していた父と同じ鹿児島大学のなかで同じような仕事に取り組むことになった縁を思った。

その後伊敷にあった青年師範附属中、続いて教育学部の附属中学校にお世話になり、高校だけは県立だったが、ふたたび鹿児島大学医学部に入学し、さらに大学院（金久卓也先生の第一内科）と10年間を学生、院生として過ごし、大学院終了の年に附属病院霧島分院助手に採用、医学部一内科助教を経て医療短大へ移動した。

医学部の学生時代の学長の福田先生から

国立療養所霧島病院長 鹿島 友義

は医学史の講義をお聞きしたし、インターン病院へ提出する推薦状を書いていただくためにお宅にもお伺いした。医学博士の学位記も福田先生から学長室でじきじきに頂いた。医療技術短期大学部では石神先生、井形先生、早坂先生の3人の名学長に仕えて大きな影響を受け、現学長の田中先生には医学部一内科時代から引き続いて大変なお世話になっている。

平成5年に国立病院へ移動するまで、ほぼ40年を鹿児島大学で過ごしたことになる。さらにその後も非常勤講師をさせていただいているが、50年の歴史のなかの、そして自分の人生の大半を鹿児島大学とともに歩いてきたことを思うと感無量であるとともに感謝にたえない。

その中でもっとも印象に残っているのはやはり医療技術短大の創設準備期間を含めて医療短大で過ごした9年間である。創設準備の時の石神学長、当時の医学部長の松本先生、病院長の井形先生、看護学校長の寺脇先生、助産婦学校長の永田先生、保健婦学校長の松下先生等にはなみなみならぬお世話になり、また当時附属学校におられた教務の先生がたには多くのご迷惑もおかけしたことを思い出している。ここに記して感謝やお詫びを申し上げたい。

医療技術短期大学部も鹿児島大学創立の母体となった多くの学校と同様に明治時代からの歴史を誇る看護学校をはじめ、保健婦学校、助産婦学校等の伝統があったとはいえ、鹿児島大学全体の絶大なる協力のもとに創設にこぎつけ出発したのだが、銚之原保健学科長をはじめとする現在の保健学科の教職員のご尽力によって、予想していたよりも早い時期に4年制の医学部保健学科として発展されたことは慶賀に耐えない。研究科設置も目前とのこと、さらなるご発展を祈ってやまない。

## 鹿大の二つの大改革



元教養部長  
現：鹿児島県立短期大学長

鹿大創立当時は（1949）は、文理学部（前身は第七高等学校）、教育学部（鹿児島師範学校）、農学部（鹿児島農林専門学校）、水産学部（鹿児島水産専門学校）の4学部構成であった。その後鹿児島県立大学から医学部、工学部が移籍して6学部構成になった。

第一の組織改革は文理学部を教養部、法文学部、理学部に分割することであった。文理学部では一般教養と基礎科目、体育、外国語を担当する教員と専門科目を担当する教員が辞令上は区別されていたが、実際はどちらの授業をも担当していた。一般教育担当の教員は、文理学部以外の学部所属学生の一般教養科目等を担当していたので、文理学部の教員の教育負担はかなり大きかったものと思われる。一般教育の充実という観点から、一般教育を担当する部局として教養部設置の動きが起こり、鹿大は信州、静岡、弘前大学と同時に1965年に文理学部が教養部、法文学部、理学部に分かれた。私は新生教養部の第1号人事で赴任してきたので、改革の際の理想と現実との齟齬や実現せずに問題点として残った事項などについては分からないので、ここでは差し控えたい。

第二の組織改革は教養部の解消である。教養部の教員が責任をもって全学の学生の一般教育等の授業を行うことができたことの利点は、卒業生が教養部で専門以外の学問分野を広く学んだことに、社会に出てからの人間形成に大きな意義を見い出していることで示されている。教養部のカリキュラムについては創立当時に比べて、外国語の履修単位が少なくなる、一般教育科目の自然科学、人文科学、社会科学の単位配分がある程度自由化し、履修単位が少なくなる一方で、理系の学部では基礎科目の単位

鹿児島県立短期大学長 田川 日出夫

が増えるなど、専門教育の方に重心が傾いてきた。

教養部における教育が学部の意向と独立に行われる弊害を予防するために、学部・教養部連絡会が持たれたが、機能していたのは対医学部だけであった。それでも医学部の入試に「生物」を課したのは最近になってからであり、それまでは「物理」、「化学」が課せられていた。生物を知らない医者が、生物としてのヒトを扱うことに疑問を感じない訳にはいかなかった。教養部での所定の単位を履修することができない学内留年生がたまってきて、500人を越す事態になったので、仮進学制度を設けたが、進学すると教養部の単位の修得を忘れ、卒業直前に事務から注意されて、教養部の教員に泣き付く学生もいた。試験を厳しくすると、学生が集団で教員と交渉をするという事も起きた。学生にして見れば、大学の学部に入学したのであって、教養部に入学したのではない、いわば通過する過程であるという認識があり、教養教育が専門教育の前に行われたため、ややもすると学生は教養教育を専門教育の下位の学問分野と誤って受け取られていた。このように教養部での学習が所期の成果を発揮できなくなったため、文部省では大学における一貫教育を重視し、教養部廃止が目的ではないといながらも、単科大学の教養部を除いて結果的には教養部が廃止されてしまった。

教養部の教員は、それぞれの専門分野を生かして学部に移籍したが、大学全体で教養教育をするという理想は、どこの大学でも十分に実現されているとは思えない。かつての教養部の教員の絶望感が聞こえてくる。願わくば曾ての文理学部の一般教養部的存在にならないことを祈る。

## 鹿児島大学創立50周年記念事業計画

本学50周年記念事業実施委員会では、同記念事業後援会（会長 鮫島 耕一郎氏）及び稲盛財団（理事長 稲盛 和夫氏）の御協力を得て、以下のような記念事業を計画しております。

- 記念式典及び祝賀会の開催（平成11年11月15日）  
（記念式典は本学稲盛会館、祝賀会はジェイドガーデンパレス）
- 記念講演会の開催（詳細は、別掲）
- 京都賞受賞者講演会の開催（内容については、10月下旬に発表）
- 学術・国際交流基金の設立
- 外国人等宿泊設備の整備（外国人宿泊施設の建設、及びあらた会館の整備）
- 五十年史の刊行（平成12年3月末日発行予定）
- その他：プッチェル作品演奏会  
学章・学歌・スクールカラーの制定  
記念碑建立 など

### 記念講演会

本学50周年を記念して、県内各地で下記のような記念講演会が行われます。受講の手続きなどは未定ですが、追って主催者から公表されますので、興味のある方々の御参加をお待ちします。なお、演題は仮題です。

10月30日（土） 13：30から 鹿児島大学稲盛会館

- |               |                                  |
|---------------|----------------------------------|
| あいさつ          | 田中 弘允 学長                         |
| 現代医療と社会のギャップ  | 平 明 名誉教授                         |
| 顔とことばを治す歯科医療  | 口唇口蓋裂患者の社会復帰のために<br>三村 保 教授（歯学部） |
| 「生と死」の倫理と日本社会 | 種村 完司 教授（教育学部）                   |

11月6日（土） 13：30から 名瀬市奄美サンプラザホテル

- |                 |                                 |
|-----------------|---------------------------------|
| あいさつ            | 小澤 貴和 教授（水産学部）                  |
| 亜熱帯域海洋学研究の現状と課題 | 黒潮と気候変動<br>市川 洋 教授（水産学部）        |
| ふりかえれば未来        | 奄美の歴史に魅せられた半世紀<br>原口 泉 教授（法文学部） |

11月7日（日） 13：30から 鹿屋市市役所大ホール

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| あいさつ                     | 榎下町鉦敏 教授（農学部）  |
| 大学と地域の連携による特色あるまちづくりは可能か | 山本 清洋 教授（教育学部） |
| 大学と地域の連携による地域づくり         | 岩元 泉 教授（農学部）   |
| 緑茶と健康                    | 園田 俊郎 教授（医学部）  |

11月13日（土） 13：30から 川内市中央公民館

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| あいさつ            | 井上 政義 教授（理学部）  |
| 都市における景観形成      | 安山 宣之 助教授（工学部） |
| 薩摩半島北西部の自然と景観形成 | 堀田 満 教授（理学部）   |



### モンテンプルパの日本人墓地

鹿児島大学医学部 附属難治性ウイルス疾患研究センター

栄 鶴 義 人

平成10年2月第三国集団研修「HIV感染及びエイズによる日和見感染症の実験室内診断技術」の講義・実習の為、フィリピン・マニラ近郊のモンテンプルパ市にある熱帯医学研究所を訪問していた。ある日曜日、一緒に某国立大学名誉教授に日本人墓地へ行かないかとの誘いを受け同行することになった。車で町並を抜け、丘を登ったところにモンテンプルパ刑務所のゲイトがある。運転手が現地語でゲイトの警官としばらく交渉し、一人の警官が制服の上着を取り、我々の車に乗り込んで来た。刑務所の塀に沿った道を更に1kmくらい進むと外人墓地の入り口に差し掛かる。キリスト教徒の墓地を過ぎ、更に500mくらい進むと道幅が狭くなる。車一台が漸く方向転換できる狭い場所に車を止めた。

我々日本人3名と制服の上着を脱いだ警官1名の4名が車を降り、狭いやや登りの道を40メートルくらい歩いたところに文字通りの木戸があり錠前が掛かっていた。どこからともなく一人の老人が現われ、無言で鍵をはずし木戸を開き我々を中に入れてくれる。さらに、墓前に供える花束と線香の束を我々の目の前に無言で差し出す。老人にいくばくかのお金を握らせ、花束と線香を受取り奥に進んだ。この間、何処からともなく4名の男達が現われ肩から下げたライフル銃に手を掛け、無言で我々を取り囲むようにして一緒に付いてくる。「こんな寂しい所で襲われたら万事休す、4対4かな、いや警官と言えども信用できないので5対3、しかし、いずれにしても逃れ様はない、その時はその時と」奇妙な開き直りの気持ちになる。

日本人墓地は、かなりの傾斜を持つ狭い斜面にあり、周囲は鬱蒼とした藪に囲まれている。墓地の中にも大きな木が何本も立っている。しかし、この墓地は、単にフィリピンで客死した日本人の墓地ではない。第二次世界大戦後、フィリピンでB級、C級戦犯に問われた日本人が処刑された場所である。定かで

はないが、この墓地にそびえる大木の枝に吊されたと言う。斜面の一番高い場所に石碑が建立され、処刑された10数名の名前が刻まれている。後に当時の戦友が訪れ、霊をなくさめる為に建立したと思われる慰霊碑があちこちにみられる。処刑された時20歳 - 30歳代であった方々の戦友もその多くは70歳 - 80歳代となり、恐らくここを訪れるのも最後だと覚悟した文言も見受けられる。勿論、さまざまな事情で客死した日本人のお墓もある。時間にしてわずか20分程度の訪問であったが、何とも表現しようのない気持ちに襲われ、線香を手向け冥福を祈った。この間、ライフル銃の男達のことはすっかり忘れ、ふと気がつくとも周囲を囲まれたまま木戸に戻っていた。はっきりした事情は分からないが、この墓地で何かの事件が起こり、為に警官が付き添い、ライフル銃の男達は我々をガードしていたことが判明した。お金を渡しお礼を述べるとニツコリ笑って消えて行った。

帰国後、本屋を覗いていたら吉村昭著の「プリズンの満月」という新潮文庫が目にとまった。パラパラとめくっていたら、モンテンプルパという文字が目飛び込んできた。この文庫本により当時の様子を知った。それによれば、昭和28年6月現在、モンテンプルパ刑務所では、17名が戦犯容疑で処刑され、110名の戦犯が刑務所に拘禁されていた。しかも、その内59名が死刑の宣告を受けており、日本やオーストラリアに拘束されている全戦犯中で残された死刑確定者であった。しかし、歌手の渡部はま子はじめ多くの人々の努力により、当時のキリノ大統領は特赦令を発し、全員を減刑し日本に送還することにした。さらに、12月には日本に送還され巣鴨プリズンに無期刑で収容されていた元死刑囚をも釈放した。

これからの数年間は、毎年マニラを訪問することになっており、時間が許す限り、日本人墓地を訪問したいと考えている。





## アルコール依存症

保健管理センター助教授

森岡 洋史



アルコール依存症は、以前は慢性アルコール中毒（アル中）とよばれていました。ほぼ毎日一定量のアルコールを十年二十年と飲みつづけることによりなる一種の薬物依存です。薬物依存は、他にはモルヒネ、コカイン、マリファナなどの麻薬、また、ヒロポンなどの覚醒剤などによるものがありますが、手に入りやすく取締りの対象になっているこれらの薬物に比べて、使用することが世間で広く許されているアルコールは薬物依存の中でも最も厄介なものといえます。

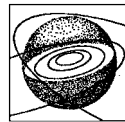
薬物依存で問題になることが3つあります。一つは、その薬物がないと落ちつかない、イライラする、同じ快感を得るためにまた使用したくなるといういわゆる精神依存です。二つ目は、その薬物が体内に入った状態でないと身体の恒常性（ホメオスターシス）が保たれないこと、すなわち身体依存です。三つ目は、同じ薬物効果を得るためには、次第にその量を増やさなければなくなるといった耐性の問題です。アルコールの場合は、耐性はあまり問題にはなりません、非常に強い精神依存と身体依存がおこります。夕方になると無性に天文館に行きたくなる、夜中に酒を売っている店を探し回るなどの行動がみられれば、それはりっぱに精神依存ができあがっているといえます。身体依存ができあがると大変です。酒がきれると手が振るえる、冷汗が出るなどの症状が出て、その時酒をのむと症状が消えるので朝から酒を飲むということにもなります。また、風邪などひいて寝込んだり、あるいは何かの病気で入院して酒を二～三日断った後などに禁断症状（離脱症状）が出る場合があります。不眠、イライラなどに続いて急速に幻覚・妄想状態が発現するのです。動悸、振るえ、発汗な

どの自律神経失調症状を伴い、けいれん発作が起こることもあります。こうなるとアルコール精神病という状態であり、精神科への入院が必要となってしまいます。

ところでアルコールは、体内に入るとアルコール脱水素酵素でアセトアルデヒドに分解され、それは、さらにアセトアルデヒド脱水素酵素の作用で水と酢酸に分解されます。欧米人にはみられませんが、日本人のような黄色人種の約4割に、このアセトアルデヒドを分解する酵素が欠損あるいはその作用が弱い人がいます。この酵素が働かない人はアセトアルデヒドが体内に蓄積され、そのせいで顔が赤くなったり、動悸がしたり、汗をかいたり、吐き気がしたりなどするのです。したがって、この酵素が働く人は、お酒に強い人、酵素が欠損している人は、お酒に弱い人ということになります。アルコール依存症はほとんどの場合このお酒に強い人になるわけですが、一方でこの酵素が働かない人はアルコール依存症になることはまずないものの、無理して飲むと、アセトアルデヒドの毒性で、内臓を壊したり、癌が高率に発生するとも報告されています。

アルコールは、普段あまり本音を言わない日本人にとっては社交上重要な媒介してくれる有りがたいものです。自分の健康を害したり、家族や職場の同僚に迷惑をかけない程度なら毎日飲んでもアルコール依存とはいいいませんが、身近に手にはいるだけに、できればお酒は上手に利用したいものです。

なお、自分にアセトアルデヒドを分解する酵素があるかないかは、パッチテストをすれば二十分くらいで判別できます。興味のある人は保健管理センターへおいで下さい。



## 日本で学ぶ理由

理工学研究科      クスヌル ジャキン  
(インドネシア)



CHOESNUL JAQIN

私は長男で小さい時から父のバイクの修理をよく手伝った。その内にバイクや車のことが好きになり、将来車のエンジニアになりたいと思うようになった。中学校と高校の時、私は車のエンジンに興味をもっていたが、講義はあまりなかった。1986年に高校を卒業し、大学の工学部機械工学科に入った。その時車の知識や技術等を得た。3年生の時、大学の車の工場に入り、実習等を始めた。毎日指導教官と他のメンバーと一緒に車の分解、修理、研究などをあらゆるところまで行った。これでやっと本格的に車のエンジンの知識が分かった。

1991年に自分の街にあるトヨタ自動車株式会社に入り、技術者（テクニシャン）として仕事を始めた。会社でいろいろな新しい知識や技術を得られ、研修等も行った。暫くの間、テクニシャンから教官（インストラクター）になり、社員の指導等を行った。しばしば会社の代表としてジャカルタにある本社で行われる研修会に参加した。そこで私の街にある支社の周りを見て何か自分の視野が狭いなど感じた。

1995年にジャカルタにあるユンダイ自動車株式会社（本社）に入り、管理者（スーパーバイザー）としてインドネシア国内の大規模なプロジェクトに参加した。しばしばタイや韓国に出張した。そこで他の国から来た人と出会って交流等を深めた。やはり世界は広いなど感じた。これまで会社でたくさん知識や技術等を獲得したが、やはりもっと自分で車の勉強や研究開発をやりたいと思い始めた。いつか機会があれば熱心に車の研究開発が行われている日本やヨーロッパの国々でもっと勉強をしたいと思うようになった。インドネシアは様々な国から車を輸入し、種類もたくさんあり、特にパフォーマンス的に優れている日本製の車が一番大人気だった。私は興味を持っているのはディーゼルエンジンの燃料と排気ガス処理だった。

1998年10月にその機会が訪れた。すぐに会社を止め、鹿児島大学に研究生として入り、日本語や実験手伝い等を行った。今修士課程1年、熱機関研究室に在籍している。研究テーマは「ディーゼル燃料としてのパーム油メチルエステルの排出ガス特性」です。

化石燃料は40数年でなくなると言われ、再生可能で地球上でのCO<sub>2</sub>の増大がほとんどない植物油をディーゼル燃料として利用するための研究がヨーロッパ（なたね油）、アメリカ（大豆油、なたね油）、オーストラリア（ひまわり油）等で始まっている。これまで指導教官研究室では、なたね油ディーゼル燃料として利用するためメタノールと反応させた、なたね油メチルエステルを使った研究が行われている。私は母国インドネシアで大量に生産されているパーム油を軽油よりも環境にやさしいディーゼル燃料として利用することを目的に研究を進めたいと考えている。

## 日本と生活の意義

農学部      モニハラポン エリノラ  
(インドネシア)



MONIHARAPON  
ERYNOLA

8ヶ月間日本に住んで、私は日本の生活について学び始めました。日本は先進国だが、まだ日本のライフスタイルは変わっていません。それは、彼らが生活の意義を非常に良く保っているからだと思います。私はいくつかのケースを経験しました。去年、日本人の家族と共に大晦日を過ごしました。12時から彼らは「そば」を食べました。これには、長生きできましようという意味が含まれています。新年の朝には、「おぞうに」と「おせち料理」を食べました。これらは、毎年習慣的なものになっています。また、成人式の日には多くの男女が伝統的な服を着ます。彼らは伝統的な服を着ていながら現代的な携帯電話を利用して友達と会話しています。これは伝統的なスタイルと現代的なスタイルの組み合わせでとてもユニークです。同じケースが、大学の卒業式で起こります。彼らが、伝統的な服を着た時、とても誇り高く、まるで「私日本人です。」と言いたがっているように思います。

日本には、たくさんの伝統的な行事、節分、ひな祭り、節句、七夕、七五三などがあります。伝統的な行事には多くの生活の意義と関係することによって構成されています。

私は、指宿にある「なの花館」を訪れました。そこで私は1つの建物に興味を持ちました。そこには、古い世代から新しい世代へ生活の意義の伝承を意図して考案されたビデオの部屋があり、日本人の生活についてのビデオをお年寄と若者が一緒に見ることができます。この時、生活の意義が伝承されます。これはよい考えであり、日本人の生活の意義を保つ最も良い方法であると思います。

なぜなら、私達は生活の価値を保つために会話をもつことが1つの効果的な方法であると思うからです。

以上が、日本の生活についての私の感想です。みなさんはどうお考えですか？



現在社会では大学に期待される社会からの要求は多様なものがあり、それらの期待に応えることも大学の重要な機能の一つとなっております。そのような流れの中で全国の教員養成系学部は従来の学校教員養成のみでなく、生涯学習時代に対応した構造の変革が迫られ、多くの大学で改革がなされております。本学の教育学部では旧教養部の語学系、保健体育系、それに生涯教育に関連する専門領域にある教育学部の教官らが中心となり、以下紹介する健康教育コース、地域社会専修、国際理解教育専修から構成される新しい課程を平成9年度に新設しました。新課程の目的は大別すると2つあります。一つは国際化時代の生涯教育領域での教育専門職を養成することであり、他の一つは学校教育教員養成課程の学生も履修できる教育課程を設け、生涯教育領域での専門的教養を習得した学校教員を養成することにあります。大きな特色は国際的視野に立った総合科学的教育と従来の講義を体験学習で検証するといった実地教育があげられます。

地域社会専修では、教授2、助教授1のスタッフのもとで広く社会全体を見渡し、子ども、青年、高齢者を視野にいれ、社会教育学(小林平造)、社会政策学(坂脇昭吉)、余暇・文化論(山本清洋)の立場から、地域社会教育、生涯学習、社会保障・社会福祉、ライフステージに対応した余暇等について学習しています。特に韓国での異文化理解、国内の与論、奄美諸島での生涯教育調査、少年自然の家を中心とした子ども理解実地教育等は多くの学生の人気を得ており、これまでにない教育効果を生んでいます。社会教育主事や学芸員、社会福祉主事、レクリエーション・インストラクターなどの資格が取得でき、広く自治体や企業における生涯教育分野を担当できる人材を養成しています。(山本清洋)

健康教育コースでは幼児から高齢者に至るまで、誰でも生きがいのある充実した生活を送り、豊かな人生を楽しむことのでき

る社会の指導者の養成を中心とした学科です。学科は分野的に健康教育学系列と健康運動学系列及び心理臨床分野で構成されています。スタッフは9名(教授6名・助教授2名、講師1名)で、各教官の主な研究分野は以下のとおりです。

・身体運動が骨代謝に及ぼす影響(末永政治)・サッカーの運動学的研究(奥保宏)・スポーツ集団の体育心理学的研究(南貞己)・種々生理活性物質の細胞生理学的研究(徳田修司)・成人病者の運動処方に関する研究(長岡良治)・運動障害の防止に関するバイオメカニクス的研究(飯干明)・最適制御を用いた身体運動のコンピュータシミュレーション・学校教育や余暇教育としての野外教育に関する研究(福満博隆)・こどもの心身の健康に影響する諸因子の分析的研究(西種子田弘芳)

また、教育指導には医学関係者や心理・心理臨床関係者など多くの先生方の協力を得て充実発展するように努力しています。

(西種子田弘芳)

国際理解教育専修は教授2名、助教授5名の構成です。21世紀を迎え世界は相互に緊密に依存しあう一方で、異文化による摩擦や衝突も増大しています。世界が平和であるためにも相互理解の必要性はますます強まっています。当専修は三つの分野からなり、地域における諸活動を視野に入れながら国際的連帯に関わる諸問題にアプローチしています。各分野の教育研究のテーマは次の通りです。異文化理解論。国際理解教育の歴史的発展と現在の意味を多角的に研究します(山原、竹内) 比較文化論。日本との比較において世界の民族的、宗教的、文化的な基層を研究します(藤田、大塚) 言語行動論。個々の言語の使用実態を社会的相互行動として捉え、ことばとその背後に存在する共同体の文化的・社会的規範とのかかわりを研究します(安東、大野、中島) (藤田正嗣)

# 平成11年度の就職セミナーについて

学生部厚生課

景気の下げ止りなどが言われているなか、来春卒業する大学生の採用試験が始まりました。しかし、マスコミなどの報道によると、来春の大卒者の求人倍率は1倍を割って(6月17日付け)今春よりもさらに落ち込み、企業の採用抑制や手控えなど、就職環境は依然として厳しい状況の一言に尽きます。

就職協定が廃止されて本年度で3年目となりますが、企業の採用活動の早期化により、授業への支障等学校教育への悪影響が指摘されておりますが、一方で採用形態も一段と多様化の様相を呈し、学校名を問わない採用や採用情報の公開等、学生の能力を重視する方向に進んでいることなど、プラス、マイナス両方の面が指摘されています。

文部、労働両省が5月12日に発表した平成10年度の大学、短大新卒者の4月1日現在の就職状況によると、大学の就職率は92.0%(男子93.2%、女子89.2%)となっています。

雇用の場に恵まれない地方の大学は大都市圏の大学に比べると条件がさらに悪くなり、九州地区では84.3%となっています。

このような状況下で、10年度の本学の就職率は83.4%(男子84.9%、女子81.2% [表1参照])となっており、相変わらず厳しい状況にあると言わざるを得ません。

本年度も、これらの諸状況に対処するため、就職活動への取り組み方や自分の適性と能力にマッチした職業の指向、公務員(教員)採用試験の制度・受験手続き、卒業生の就職活動の体験談、面接時のマナーなどを始めとする「就職セミナー [表2参照]」を開催します。

本学では、就職協定廃止後の就職活動を有効にサポートするため、既に「就職情報コーナー」が附属図書館、桜ヶ丘分館及び水産学部分館の3カ所に開設されており、就職対策用として、現在17台のパソコンが利用に供されています。また昨年は、学生部に「就職相談室」が設置され、これらのコーナーや相談室ではインターネットを利

用して、講義の合間に企業の求人情報の入手やエントリーシートによる応募手続き等が可能で、多様化する就職環境の変化にも迅速、適切に対応できる態勢が整えられています。

近年、学生の就職意識の変化や、就職後のいわゆるミスマッチなどが言われていますが、大部分の学生にとって、就職問題は人生設計の根幹に関わる重大事であることに変わりありません。

最近、本学においても就職活動のあきらめや就職浪人の選択を耳にしますが、未来に夢を持ち、積極果敢な就職活動への取り組みとこの就職セミナーが大きな力となって、それぞれが希望する職業に就かれることを祈ってやみません。

[表1] 平成11年3月卒業者の就職状況

学 部 名	法文	教育	理	工	農	水産	計	
卒 業 者 数	430 (205)	347 (185)	182 (54)	402 (70)	242 (106)	151 (37)	1754 (657)	
進 学 者 数	26 (8)	31 (13)	69 (12)	168 (19)	67 (23)	53 (14)	414 (89)	
就職希望者数	286 (147)	154 (73)	87 (33)	216 (49)	165 (83)	88 (20)	996 (405)	
就 職 者 数	245 (114)	124 (58)	62 (30)	200 (44)	137 (69)	63 (14)	831 (329)	
そ の 他	159 (83)	192 (114)	51 (12)	34 (7)	38 (14)	35 (9)	509 (239)	
就 職 率 ( % )	85.7 (77.6)	80.5 (79.5)	71.3 (90.9)	92.6 (89.8)	83.0 (83.1)	71.6 (70.0)	83.4 (81.2)	
地 区 別 就 職 者 数	鹿 児 島	133 (69)	110 (53)	34 (20)	59 (17)	59 (34)	26 (5)	421 (198)
	九 州	48 (24)	9 (4)	15 (6)	56 (12)	30 (19)	15 (6)	173 (71)
	関 東	47 (15)	1 (0)	12 (4)	55 (9)	14 (4)	12 (1)	141 (33)
	そ の 他	17 (6)	4 (1)	1 (0)	30 (6)	34 (12)	10 (2)	96 (27)

医・歯学部は除く、女子は( )書きで内数として示す。

[表2] 平成11年度の就職セミナー

セ ミ ナ ー 名	開 催 期 日 ( 予 定 )	内 容 等
講 演 会	6月30日	就職自己啓発入門 - 絶対内定するためのノウハウと裏ワザ -
企 業 ガ イ ダ ン ス	9月下旬	県内企業の人事担当者との直接面談
講 演 会	10月下旬	県外企業の人事担当者による就職心構えの講演、面接試験のためのマナー講習
公 務 員 採 用 試 験 制 度 説 明 会	11月中旬	人事院九州事務局及び鹿児島県人事委員会事務局による受験手続き等の説明

## サークル紹介

### 鹿児島大学学友会男声合唱団フロイデ・コール

理学部3年 小牟田 剛

歌うこと、ハーモニーすることが楽しくてしょうがない。ただハーモニーにひたり、音楽の波にゆられて我を忘れる。全員の心が一つになり、その音楽が感動の流れとなって広がっていく。高校時代には合唱とは無縁であった多くの学生が偶然このフロイデスピリットに出会い、鹿大でのキャンパスライフを思い出深いものにしてきました。

フロイデコールは鹿児島大学創学の年、昭和24年に発足しました。旧制・第七高等学校造士館音楽部から受け継ぐ、伝統と実績が私たちの誇りです。

初代顧問部長に故・山根銀五郎先生（理学部名誉教授）、二代目・橋口正夫先生（理学部名誉教授）、現任・高松英夫先生（医学部教授）、副顧問部長・黒木荘一郎先生（工学部助教授）、そして根本千春氏（初代主将、OB会「楠声会」会長、法文学部同窓会会長）を初めとする、歴代部員五百余名が、熱い情熱を注ぎ込みながら歴史を積み上げ、現在に至ります。

毎年入学式典で演奏している七高寮歌「北辰斜めに」と、鹿大三十周年記念歌「火の島は」は、私たちの手によって選び出され、男声合唱曲として編曲されたものです。このような晴れの場で、全ての入学生に鹿大のスピリチュアルを伝え、独自の文化を示す役割は、大変な名誉と自負しています。

今後ともご支援をよろしくお願いします。  
<http://kankyo.aae.kagoshima-u.ac.jp/freude/>



### 鹿児島大学学友会水泳部

教育学部 3年 穂積 英昌

水泳部は、春夏は週に6回、秋冬は週に5回練習しています。おもな年間行事は、3月に九州学生短水路選手権、強化合宿、5月は九州の各大学と対抗戦。6月は九州国立選手権と九州学生選手権、7月は九州インカレ、8月は全国国公立選手権と積極的に試合に参加し、日頃の練習の成果を発揮しています。今年は九州学生選手権の2部で優勝し、九州で8校だけの1部に上がることができ、九州インカレでは男女とも総合2位と好成績でした。

水泳部の特徴は、部員がすべての学部から集まっているということと、全く泳げないという人も入部してくるということです。全く泳げない人も1ヵ月たつと100M、2ヵ月たつと200Mと泳げるようになっていきます。

練習はもちろん厳しい時も多いですが、各個人の泳力にあった練習が記録を伸ばす基本なので、無茶することはありません。アルバイトをすることも練習にあまり支障がない限り認められています。

鹿大水泳部は、自由で明るい雰囲気のもとで厳しい練習をし、自分を伸ばし、そしてチームを伸ばしていこうという考えで活動しているので、自らのスポーツ生活はもちろん、大学生活をも豊かなものにしてくれます。

水泳に興味があり、けじめのある生活をされたい方は是非見学にいらしてください。部員一同お待ちしております。

## 新任教官紹介

平成11年4月1日から平成11年6月30日までの間に就任された教官（講師以上）は次のとおりです。

よねだ けんいち  
米田 健一 （法文・助教授・法政策）  
修士（法）



（生）昭和41年4月13日  
（学）神戸大学大学院法学研究科博士課程前期課程  
（前）神戸大学法学部講師  
（担）法社会学、法政策論、法社会学特論

写したり覚えるだけではなく、そのテーマを自分なりに取り組んで答えを出してみようという“出発点”を、伝えられればと思います。

さかた ゆうすけ  
坂田 裕輔 （法文・講師・経済情報）  
博士（国際公共政策）



（生）昭和46年8月18日  
（学）大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程  
（前）なし  
（担）環境経済学

環境問題に関する理論と現実のギャップをどう埋めるのか、学生と一緒に考えていきたいと思っています。

おざき たかひろ  
尾崎 孝宏 （法文・助教授・人文）  
修士（学術）



（生）昭和45年4月30日  
（学）東京大学大学院総合文化研究科修士課程  
（前）なし  
（担）比較文明論

大学教員としての生活にもようやく慣れて参りました。教育と研究に、一生懸命頑張りたいと思っています。

おおまえ よしかず  
大前 慶和 （法文・講師・経済情報）  
修士（商）



（生）昭和44年7月28日  
（学）慶応義塾大学大学院商学研究科修士課程  
（前）なし  
（担）経営戦略論、経営学総論

学生が多面的なものの見方を身に付けられるように、刺激ある教育を行いたいと考えております。

おう ほりん  
王 保林 （法文・助教授・経済情報）  
博士（経済）



（生）昭和39年8月5日  
（学）東北大学大学院経済学研究科博士課程後期  
（前）東北大学経済学部助手  
（担）共通教育中国語

ベストを尽して、教育と研究に頑張りたいと思っています。

まえだ まさと  
前田 雅人 （教育・助教授・保健体育講座）  
博士（医）



（生）昭和35年9月30日  
（学）鹿児島大学医学部  
（前）大島郡医師会病院循環器内科  
（担）生理学

これまでは患者さんにより良い治療を行うことを目的に頑張ってきました。今後は臨床の経験を教育の場に生かしたいと思っています。

かみたに しゅんざぶろう  
上谷 順三郎 (教育・助教授・国語教育講座)  
修士(教育)



(生) 昭和37年2月2日  
(学) 筑波大学第二学群人間学類  
(前) 岩手大学教育学部助教授  
(担) 国語A、国語科教育、国語科教育演習、近代文学講読、言語表現論、国語科教育学特論(院)、国語科教育学特論演習(院)  
国語科教育学

「一年の半分は冬」の岩手から  
「一年の半分は夏」の鹿児島へ。  
この違いを楽しみにしながら、教育・研究に取り組みたいと思います。

おえ かずき  
小江 和樹 (教育・助教授・美術教育講座)  
修士(教育)



(生) 昭和36年12月27日  
(学) 大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程  
(前) 岐阜市立女子短期大学・講師  
(担) 美術教育学

今後も教育・研究において、なお一層の努力を重ねていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

ゆうくら みき  
有倉 巴幸 (教育・助教授・学校教育講座)  
修士(文)



(生) 昭和40年8月31日  
(学) 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期  
(前) 鹿児島女子大学(現志学館大学)文学部講師  
(担) 入門心理学、教育心理学演習他

これまでに培ってきた知識を活かして、心理学の面白さを学生に伝えていけたらと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

やすい つとむ  
安井 孜 (教育・教授・数学教育講座)  
博士(理)



(生) 昭和21年2月9日  
(学) 広島大学大学院理学研究科修士課程  
(前) 山形大学教育学部助教授  
(担) 幾何学 ~、初等幾何学

北国・山形に25年間もいたせいか、暖かい鹿児島には開放感があります。20才位若返った気分です。研究(数学)を続けています。

ささ ひろゆき  
佐々 祐之 (教育・講師・数学教育講座)  
修士(教育)



(生) 昭和43年8月11日  
(学) 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期  
(前) 広島大学附属福山中・高等学校教諭  
(担) 数学教育

代数的な領域をベースとした教材論や創造性を培う数学教育に興味を持っています。今後ともよろしくお願い致します。

たまつ ゆういち  
田松 裕一 (歯・講師口腔解剖学2)  
博士(歯学)



(生) 昭和38年9月17日  
(学) 岡山大学歯学部東京歯科大学大学院歯学研究科  
(前) 東京歯科大学・講師  
(担) 口腔解剖学、顎骨の生体力学

鹿児島大学の発展と知・心・技を高次で具えた歯科医師の育成を目指して、日々の研究と後進の教育に尽力していきたいと思っております。

たけうち やすひと  
竹内 康人  
博士(工)

(工・教授・情報工)



(生) 昭和19年9月3日  
(学) 東北大学大学院工学研究科博士後期課程  
(前) GE横河メディカルシステム(株)技術開発センター超音波研究室長  
(担) 信号処理工学、信号処理工学特論

産業界および医学界における経験を生かして、目的意識の明らかな、ビジネスマインドのある信号設計の学問を構築したい。

どい としや  
土井 俊哉  
博士(工)

(工・助教授・電気電子工)



(生) 昭和37年4月7日  
(学) 京都大学大学院工学研究科修士課程  
(前) (株)日立製作所日立研究所研究員  
(担) 電子材料特論、量子力学

現代のハイテク文明を支える電子デバイスの分野で、鹿児島から新しい芽を育ててみたいと思います。

やまね さとし  
山根 智  
博士(工)

(工・助教授・情報工)



(生) 昭和33年10月15日  
(学) 京都大学大学院工学研究科修士課程  
(前) 島根大学講師  
(担) 情報数学、オートマトンと言語理論、ソフトウェア工学、コンピュータサイエンス

コンピュータ業界で活躍できる学生の育成及びコンピュータサイエンスの研究に従事したいと思います。

うえだ たけひこ  
上田 岳彦  
博士(工)

(工・助教授・生体工)



(生) 昭和38年4月10日  
(学) 京都大学大学院工学研究科博士後期課程  
(前) 京都大学助手  
(担) 生体超分子化学

生体分子が自発的に集合して調和のとれた組織構造を作るために必要な分子レベルのしくみを解明していきたい。

しもしきりょう すみこ  
下敷領 須美子  
修士(社会)

(医・講師・保健)



(生) 昭和26年12月9日  
(学) 東洋大学大学院社会学研究科博士前期課程  
(前) 鹿児島大学医療技術短期大学部非常勤講師  
(担) 母性健康論、助産診断学、地域母子保健

保健学科の5階からは雄大な桜島が眺められます。自然の懷に抱かれて楽しくのびやかに学び合いましょう。

コウ ソン フィ  
高 鮮 徽  
博士(社会)

(水産・助教授)



(生) 昭和35年9月7日  
(学) 中央大学大学院文学研究科社会学専攻後期課程  
(前) 中央大学文学部非常勤講師  
(担) 演習(海と人間社会、)水産社会学特論、水産社会学特別演習

鹿児島でできることを積極的に楽しみたいと思っております。



## 学内ニュース

### 鹿児島大学研究者総覧ホームページ

9月公開予定

鹿児島大学では、本学に所属する全研究者約1,100名1人1人の研究、教育、社会活動等に関する情報を掲載した「鹿児島大学研究者総覧」を1992年に創刊し、教育研究機関や自治体、図書館、企業などの関係機関に、本学に所属している研究者の情報を提供してきました。これらの情報は、大学と社会との、また学内外研究者間の交流や連携協力の推進に大きな役割を果たしており、今年度第4版の発刊が計画されています。

現在、地域共同研究センターでは、この「鹿児島大学研究者総覧」の情報がさらに広範な皆様からアクセスが可能となるようデータベース化し、ホームページで公開する作業を進めています。研究者総覧ホームページでは、インターネットに繋がり何処からでもNetscape Navigator や Microsoft Internet Explorer等のブラウザを通じて、本学に所属する全研究者の情報を閲覧出来るようになります。また、検索機能を使えば、550頁を超える印刷物である研究者総覧では困難であった、研究内容から研究者を探し出すことも容易になります。さらに、研究者本人あるいは部局担当者による遠隔からの編集を随時行って、常に最新情報が掲載出来るようになります。鹿児島大学研究者総覧ホームページは9月公開予定です。ご期待ください。なお、鹿児島大学のホームページアドレスは、  
<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>です。

### 遺伝子実験施設の建物竣工

平成10年度から建設が進められていた遺

伝子実験施設の建物が、本年7月に竣工しました。建物の位置は農学部の北門の近くで、郡元地区共同利用R I実験室と廊下により接続されており、4階建ての延べ床面積1,504.7㎡(建て面積369.9㎡)の建物です。この施設の特徴は、P3レベルまでの組換えDNA実験が行える実験室と、学生実験に使用できる学生実験室を有することです。また、1階と2階の一部にR I管理区域があります。施設の利用希望者は、研究協力課に御連絡下さい。



### アイソトープ総合センターの設置決定

本学のライフサイエンス分野における放射性同位元素(R I)利用の増加に対処するため、アイソトープ総合センターが本年4月に学内共同教育研究施設として、国立大学では19番目に設置されました。

鹿児島大学では、郡元地区共同利用R I実験室、医学部R I実験室、歯学部R I実験室、及び水産学部R I実験室の4カ所で

R Iを用いた実験が行われています。しかし、専任の教官は配置されていないため、R Iの使用管理に適切なアドバイス等を得るのがなかなか困難な状況でした。

平成11年度には専任教官（助教授）が配置される予定であり、今後、遺伝子実験施設の隣に建設が予定されている建物と、本格的分析機器等の設備の整備に伴い、全学的なR Iの安全管理と研究の高度化のより一層の推進が期待されます。

#### 「多島域における小島嶼の自律性」研究

##### プロジェクト進行中

多島圏研究センターでは、現在「多島域における小島嶼の自律性」を主題とした文系・理系の学内研究者が協調して行う総合研究プロジェクトが進行中であり、その一環として本年10月には、約30人がミクロネシア連邦のヤップ島で調査を実施する予定です。

当センターは、学内共同教育研究施設として、人と自然の相互作用、地形・生物伝播などの自然地理、社会・文化変容と自然環境、社会医学的環境、国際社会の中の島嶼国家の役割、の5研究課題について、専任教官、外国人客員研究員、学内兼務教官、国内・外協力研究者が協力して総合的・学際的な研究を行っています。

#### かごしま丸遠洋航海へ出航

水産学部附属練習船かごしま丸が、船長以下31名の乗組員と、女子学生10名を含む35名の学生（水産学科32名，水産教員養成課程2名，専攻科1名）を乗せて、7月30日 東洋インド洋への46日間にわたる遠洋航海のため谷山港を出航しました。

この航海は、水産学科学学生等に対する漁業実習及び航海運用学実習等のために毎年行われているもので、本年は8月13日ベノ

ア（インドネシア）に寄港、清水・生鮮食料等の補給、学术交流、水産事情調査、施設見学等を行い、東部インド洋で海洋観測、航海実習及び鮪延縄漁業実習の後、8月27日ウジュンバンダン（インドネシア）、9月7日パラオ（パラオ共和国）に寄港し、これらの寄港地でも食料等の補給の他、漁業に関する学术交流を行って、9月16日に谷山港に帰港する予定です。

当日の出航式では、田中学長が公務で出席できなかったため、野崎学生部長による学長壮行の挨拶、市川学部長の挨拶に引き続き、東川船長、田中安曇実習生代表の挨拶、船長及び実習生代表への花束贈呈等が行われ、乗組員・実習生の家族、報道関係者のほか大学関係者・学生等多数に見送られ、蛍の光の曲とともに岸壁を離れていきました。





附属図書館ホームページからオンラインジャーナルが閲覧できます。

鹿児島大学で購入中の外国雑誌のうち、79タイトルの雑誌が附属図書館ホームページから閲覧できます。

本学の学内LANに接続されたパソコン等からであれば、24時間自由に利用できます。

附属図書館内にも利用できるパソコンが設置してありますので、どうぞご利用ください。

問い合わせ先

附属図書館情報サービス課参考調査係 内線7440・7441

附属図書館の利用方法や文献検索についてのガイダンスを実施しました。

附属図書館では、新入生を主な対象とした初級コース、2年生以上を対象とした中級コースの各ガイダンスを4月から6月にかけて実施しました。

図書館サービスを活用してもらうために、利用案内・OPAC（鹿児島大学蔵書検索）・館内案内（以上初級コース）、CD-

ROM文献検索・インターネット検索（以上中級コース）についての説明を行いました。

玉里文庫 - 国書と絵図関係資料 - のマイクロ化・電子化（CD-R）を行いました。

附属図書館では、電子図書館的機能の充実・強化のひとつとして本館所蔵の貴重資料<玉里文庫>のマイクロ化・電子化（CD-R）を平成8年度より行っています。

今回「沖縄関係資料」「薩摩藩関係資料」に続き、教育研究学内特別経費による措置のもと、「国書と絵図関係資料」を76点（524冊、14枚、1包）作成しました。

CD-Rは検索ソフト付きのWindows版とMacintosh版があり、現在のところ利用する場合はパソコン単体による利用形態となっています。

玉里文庫についての問い合わせ先

附属図書館情報サービス課資料サービス係  
内線7435・7436

## 編集後記

151号から、新しいメンバーの広報委員会で鹿大広報を編集することになりました。どうぞよろしく願いいたします。

本号の特集記事は、「50周年」です。ただ、このような良いネタがありながら、これまでと余り変わらない記事になりましたことは、ひとえに編集委員長の力とセンスのなさの故であり、お詫びします。やはりこのようなことは、その道の専門家の助言・指導が必要と痛感した次第ですが、本号の記事を御覧になって、一人でも多くの方々が本学の50周年の行事に御参加いただければ幸いです。

本号から、「学内ニュース」のページを設けました。鹿大広報は、年に3回しか発行されませんので、up-to-dataなニュースには不向きかもしれませんが、本学内外に発信したいニュースがありましたら、広報委員までお知らせ下さい。

最後になりましたが、本号に対し御多忙にもかかわらず玉稿をお寄せいただきました皆様に厚く御礼申し上げます。また、引き続き表紙のデザインをお引き受けいただきました教育学部の梅田晴郎教授、事務担当の庶務課原本邦廣専門員、並びに企画その他全般について御協力いただいた、広報委員の先生方に感謝いたします。（歯学部 大工原 恭）

本誌に関するご意見・ご感想を下記までお知らせください。

電話 099 285 7025

FAX 099 285 7034

## 広報委員会委員

大工原恭（委員長・評議会）

上田耕平（評議会）

古川一男（補導協議会）

林 国興（共通教育委員会）

上村浩明（法文） 池川 直（教育）

根建心具（理） 榮鶴義人（医）

北野元生（歯） 宮崎智行（工）

田代正一（農） 安藤清一（水産）

吉田義弘（医）

鹿大広報 第151号

平成11年9月10日発行

編集・発行

鹿児島大学広報委員会

住所：〒890 8580

鹿児島市郡元1丁目21番24号

電話：099 285 7025

FAX：099 285 7034

印刷：斯文堂(株)